研　究　業　績

近年における北陸三県の高令人口推移について

国立療養所富山病院
長谷田　祐　作

は　じ　め　に

先に本誌第９巻において富山県県庁所在地である富山市（以下Ｔ市と略す）では，ここ20年間において超高令者（90才以上）は都市的地域で約10倍，農村的地域で２倍強の増加が認められ著明な対比を示していることを明らかにした。

今回はこうした県庁所在地を中心とした周辺市町村における高令者の人口状況を知る目的で北陸３県の推移を比較検討したのでその成績を報告し会員諸兄の御批判を仰ぎたいと思う。

なお北陸３県として富山・石川・福井の県庁所在地を略記すると図１の如くであり，その周辺市町村の概況を記すと図２，３，４の如くとなる。

図１　北陸３県略図

図２　富山市及び周辺

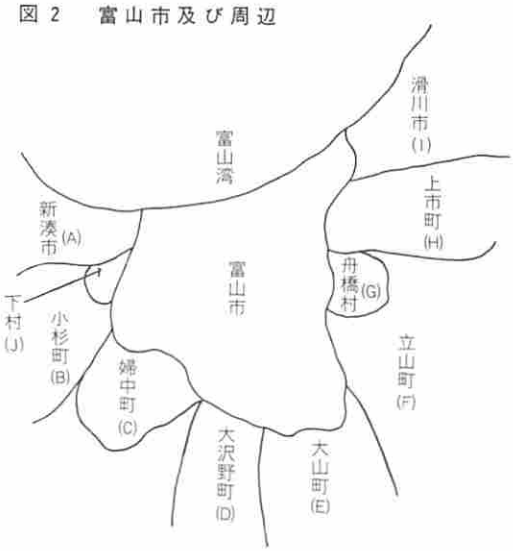

図３　金沢市及び周辺

図4　福井市及び周辺

研　究　方　法

富山・石川・福井3県について人口静態（国勢調査）資料を昭和40年以降のものを対象として調査した。

高令進行の指標として使用したのは老年人口割合，長寿者率を主とし，他に2，3の指標をも参考として挙げた。

今回はその中とくに富山県分を主として報告する。

研　究　成　績

1）北陸3県における場合

表1の如く総人口は昭和45年にあっては伸びがやや down しており特に福井県では著明である。その他の年次ではほぼ順調な増加傾向を示している。

高令人口については60～64才及び，65才以上を区分して挙げたのであるが，全般的に順調な伸びを示している。ただし昭和45年次における60～64才人口については富山県の場合減少を示し他の2県もその伸びは著しく低下している。

これらの状況は老年人口割合でもはっきりと示され上記3県とも順調な数字の伸びを見ることができる。中でも福井県においては最も大きい数値を示しており，石川・富山の順となるが昭和50年以降では富山が石川を凌駕する傾向を示している。

長寿者率でも同様の傾向が認められる。

超高令者率では富山・石川両県ともほぼ順調な伸びを示すが福井県では一進一退の傾向を見せている。

表1　各県別人口など（年次別）

富　山	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	1,025,465	40,049 69,468	521	2	6.7	10.6	7.4	1.9
昭和45年	1,029,695	45,437 83,206	720	3	8.0	12.4	8.6	2.9
昭和50年	1,070,791	51,482 101,265	893	4	9.4	14.2	8.8	3.7
昭和55年	1,103,459	50,938 123,407	1,227	10	11.1	15.7	9.9	9.0

石　川	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	980,499	38,011 70,344	541	2	7.1	11.0	7.6	2.0
昭和45年	1,002,420	42,701 81,740	705	1	8.1	12.4	8.6	0.9
昭和50年	1,069,872	47,988 97,825	901	6	9.1	13.6	9.2	5.6
昭和55年	1,119,304	48,526 117,580	1,240	12	10.1	14.8	10.5	10.7

福　井	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	750,557	30,064 58,778	457	2	7.8	11.8	7.7	2.6
昭和45年	744,230	32,502 67,032	707	5	9.0	13.3	10.5	6.7
昭和50年	773,599	35,738 78,349	745	4	10.1	14.7	9.5	5.1
昭和55年	794,354	36,132 91,595	986	8	11.5	16.0	10.7	10.0

100才以上の人口割合は人口100万対で見たものであるが富山県のみ順調な伸びの傾向を見せているが石川・福井では一進一退の状況である。

2）富山県について

イ）市部及び郡部

表2で見る如く総人口は市部では順調な伸びを示すとはいうものの，内容的には漸減の傾向を見せている。

郡部では昭和45年に著明な落ち込みが見られ，そのあと漸増傾向に転じている。

高令人口について見ると昭和55年には市，郡部とも60～64才の年令層は減少を示しているが，その他の年次では着実な増加を見せ特に市部では明瞭である。

老年人口割合，長寿者率は両地区ともほぼ規則的に増加の傾向を見せているが超高令者率については昭和45年，50年とやや停滞している。

表2　富山県内郡市別人口など

市　部	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	668,979	25,277 42,807	306	2	6.3	10.1	7.1	2.9
昭和45年	715,515	30,598 55,088	476	2	7.6	11.9	8.6	2.7
昭和50年	749,656	35,238 67,802	601	1	9.0	13.7	8.8	1.3
昭和55年	773,642	35,092 83,556	768	5	10.8	15.3	9.1	6.4

郡　部	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	356,486	14,772 26,663	215	0	7.4	11.6	8.0	0
昭和45年	314,180	14,839 28,118	244	1	8.9	13.6	8.6	3.1
昭和50年	321,135	16,244 33,463	292	3	10.4	15.4	8.7	9.3
昭和55年	329,817	15,846 39,851	459	5	12.0	16.8	11.5	15.1

100才以上の人口割合については市部では一定の傾向を認めないが郡部では認め得るようである。

ロ）T市及びその周辺市部

T市の総人口は表3で見る如く，昭和50年次に最も大きな伸びを示している。

高令人口では60～64才の年令層で，昭和55年次の伸びが著しく小さい。

65才以上では年次毎の増加傾向が確実に認められる。

90才以上の超高令者も同様である。

これらの結果として老年人口割合，長寿者率ともに確実にその数値を伸ばしている。

超高令者率及び100才以上の人口割合については昭和50年次に停滞の状況がうかがわれる。

周辺の市部では，A市の場合総人口の減少傾向，I市では一進一退の様相，それぞれに認めることができる。

反面，高令人口については年次的に見て着実に増加を示している。ただし昭和55年次の60～64才人口のみ前年次50年に比し減少を見せている。

表3　各地域別人口など（T市及び周辺市部）

T　市	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	252,932	9,114 14,455	102	1	5.7	9.3	7.0	3.9
昭和45年	269,276	10,719 17,960	160	2	6.6	10.6	8.9	7.4
昭和50年	290,143	12,713 23,694	199	0	8.1	12.5	8.3	0
昭和55年	305,055	12,797 30,045	273	2	9.8	14.0	9.0	6.5

表 3　続き(周辺市部)

A　市	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	46,870	1,834 3,077	15	0	6.5	10.4	4.8	0
昭和45年	45,701	2,128 3,663	23	0	8.0	12.6	6.2	0
昭和50年	44,700	2,294 4,415	31	0	9.8	15.0	7.0	0
昭和55年	43,093	2,151 5,109	30	0	11.8	16.8	5.8	0

I　市	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	30,256	1,300 2,095	15	0	6.9	11.2	7.1	0
昭和45年	30,039	1,419 2,628	25	0	8.7	13.4	9.5	0
昭和50年	30,456	1,531 3,142	20	0	10.3	15.3	6.3	0
昭和55年	30,744	1,494 3,788	35	0	12.3	17.1	9.2	0

表 4　各地域別人口など(T市周辺町村部)

B　町	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	16,002	659 1,065	8	0	6.6	10.7	7.5	0
昭和45年	18,705	766 1,343	5	0	7.1	11.2	3.7	0
昭和50年	23,199	896 1,695	11	0	7.3	11.1	6.4	0
昭和55年	26,858	951 2,171	28	0	8.0	11.6	12.8	0

C　町	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	23,082	932 1,599	20	0	6.9	10.9	12.5	0
昭和45年	22,788	1,088 2,014	19	1	8.8	13.6	9.4	43.8
昭和50年	24,313	1,162 2,521	26	0	10.3	15.1	10.3	0
昭和55年	26,458	1,200 3,157	27	0	11.9	16.4	8.5	0

D　町	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	17,504	670 1,124	8	0	6.4	10.2	7.1	0
昭和45年	18,207	748 1,399	17	0	7.6	11.7	12.1	0
昭和50年	19,172	802 1,695	10	1	8.8	13.0	5.8	52.1
昭和55年	19,689	817 2,010	14	0	10.2	14.3	6.9	0

E　町	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	12,286	477 764	1	0	6.2	10.1	1.3	0
昭和45年	11,804	581 871	1	0	7.3	12.3	1.1	0
昭和50年	11,469	608 1,127	4	0	9.8	15.1	3.5	0
昭和55年	12,656	562 1,422	14	0	11.2	15.6	9.8	0

F　町	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	27,886	1,198 2,056	19	0	7.3	11.6	9.2	0
昭和45年	27,473	1,275 2,442	20	0	8.8	13.5	8.1	0
昭和50年	27,226	1,442 2,791	17	1	10.2	15.5	6.0	36.7
昭和55年	27,870	1,357 3,341	37	0	11.9	16.8	11.0	0

表4　続き(周辺町村部)

H　町	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	24,107	953 1,771	8	0	7.3	11.2	4.5	0
昭和45年	23,717	1,091 2,061	16	0	8.4	13.0	7.9	0
昭和50年	24,015	1,329 2,419	21	0	10.0	15.6	8.6	0
昭和55年	24,028	1,205 2,987	25	0	12.4	17.4	8.3	0

G　村	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	1,344	59 97	1	0	7.2	11.6	10.3	0
昭和45年	1,357	71 116	1	0	8.5	13.7	8.6	0
昭和50年	1,386	74 142	3	0	10.2	14.1	21.0	0
昭和55年	1,360	67 178	0	0	13.0	18.0	0	0

J　村	総人口	60～64才人口 65才以上人口	90才以上人口	100才以上人口	老年人口割合(1)	長寿者率	超高令者率	100才以上人口割合
昭和40年	2,027	90 143	0	0	7.0	11.4	0	0
昭和45年	1,955	109 188	2	0	9.6	15.1	10.6	0
昭和50年	1,902	92 221	2	0	11.6	16.4	9.0	0
昭和55年	1,945	91 252	5	0	12.9	17.6	19.8	0

ハ）周辺町村部

総人口について明らかな増加傾向を示すのはB・C・Dの各町でE・F・Hの各町では減少ないし停滞傾向が認められる。

高令人口では65才以上は年次毎に確実な伸びを示しているが60～64才では減少ないし明らかな伸びの減少傾向が認められる。

村部にあっては総人口は一進一退しているにもかかわらず高令人口のみは同様確実な伸びを示している。そして昭和55年次にあっては60～64才人口の減少は明瞭に認められるのである。

考　　察

従来，人の生涯は医学的見地から乳児期に始まって幼児，学令，思春，青年，壮年の時期を経て満60才より老年期を迎えることとされていた。しかし近年，観点の多様化から例えば生産活動に注目して，年少期(年少人口)，生産活動期（生産年令人口)，生産離脱期（老年人口）という区分も繁用され，この場合の老年期は満65才をもって始められることは周知の如くである。

今回使用した指標の一である老年人口割合は，この生産活動を基にしたものであることは言うまでもない。これに対し長寿者率の方は従来の医学的区分による老年期人口の割合といえる。

これら老年人口割合，長寿者率，何れも北陸3県では年次的に上昇を示している。総人口の伸びは出生・社会増加の他に死亡の減少が要因であるが上記2指標の上昇は超高令者率の上昇に裏付けられているように出生，社会増加の割合を上回る高令者の生存，換言すれば死亡の減少傾向を意味するものと考えられないであろうか。

特に老年人口割合は1.3～1.7の幅で増加して居り20年ないし30年で15%に達する。老年人口割合が8%から15%に達するのにイギリスは45年，アメリカ60年，スウェーデン80年，フランス 125年要したと言われているのに比較すると北陸3県のスピードはかなり早いということができよう。

超高令者率は概略的に長寿傾向を示すもの

とされるが富山・石川両県では概ね順調な傾向を示している。

100才老人の人口対比の意味づけは今の処断言することは困難であるが各種の指標と並行的な傾向があれば，当然一定の結論は可能と考えられ，この観点に立つ時，富山県に表われた各種指標の数値には相当の重味が感じられるのである。

はじめに述べた如く富山県内における高令者の年次的変化が都市的地域，農村的地域によって著しい差が認められるか否かを県庁所在地を中心とした周辺地区で追求した次第であるが市町村別という区分では，少なくとも富山県においては，この意図は満足すべき成果を得なかったと言える。何れの市町村にあっても概況としては高令人口の増加は同様な傾向として認められ，既報の如き地域による顕著な対比は得られなかったからである。今後，石川，福井両県についての結果を待って更に検討を進めたいものである。

なおT市周辺町村において東南側E，F，Hの各町では総人口の減少ないし停滞傾向を示すのに対し，西南側B，C，Dの各町では増加傾向が明らかである著明な対比を示していることは興味深く，今後追求すべきものと考えられる。

お わ り に

北陸3県における高令人口の推移を人口静態（国勢調査）資料により追求，主として富山県内のものにつき報告した。石川・福井については次の機会をまちたい。

文　献

富山県農村医学研究会誌第9巻　昭和53年3月
日本老年医学会雑誌Vol.19No.1昭和57年1月
厚生の指標第29巻第1号　昭和57年1月
老人科診療第2巻第4号　昭和56年10月